

12 タラノキの増殖法検討試験

背景と目的

市内農協では、冬の農閑期に栽培する高収益作物として、たらの芽の伏せ込み栽培の導入を検討しています。伏せ込み栽培に使用する穂木を確保するに当たり、株の増殖が必要となるため、2通りの増殖法について調査検討しました。

関係先 市内農協

試験方法

(1) 供試品種 ‘深山’ (固定種)

(2) 試験区

直植区	種根を採取後に直接圃場に植え付ける区
育苗区	種根を育苗箱に根伏せした後、ポリポットに鉢上げして育苗し、圃場に定植する区

(3) 作型 露地栽培

耕種概要

(1) 種根の掘り上げ

4月15日に、農業センターで栽培している2年目の株の頂芽の膨らみを確認後、2株(茎長40cm, 56cm)を掘り上げ、鉛筆程度からやや太い根を15cmに切り分け、種根として70本採取しました。

(2) 各区の経過

	直植区	育苗区
4月15日	種根16本を圃場に植え付け。 (深さ3cm)	種根54本を育苗箱に根伏せし(深さ2cm)、 温室内で管理。 (ポットフミンLP12:ピートモスT級=1:1)
5月24日	—	萌芽した種根を9cmポリポットに鉢上げし、温室内で育成。 (ポットフミンLP12:ピートモスT級:蝦夷砂(中粒)= 1:1:2)
6月18日	—	苗(16株)を圃場に定植。

(3) 栽植密度: 畝間3m×株間1m, 333株/10a

(4) 施肥量: N:P:K=5.3:12.0:10.0 (kg/10a)

(5) 防除: なし

(6) その他: ダークグリーンマルチ使用

試験結果

(1) 萌芽 (表1)

温室で萌芽させた育苗区は、露地の直植区より12日早く萌芽しました。

その後、直植区は100%萌芽し、萌芽終日数は49日でした。育苗区は断続的に萌芽が続き、観察打ち切り時点での萌芽率は87%でした。

表1 萌芽

調査区	萌芽始	萌芽始日数 (日)	萌芽終	萌芽終日数 (日)	萌芽率 (%)
直植区	5月10日	25	6月3日	49	100
育苗区	4月28日	13	(6月18日)	(64)	87

(2) 初期生育及び定植時苗質 (表2)

育苗区の定植日である6月18日に、直植区の株及び育苗区の定植苗を比較すると、直植区の株の葉長が14.7cm長く、葉数は1.2枚多い状態でした。

表2 初期生育及び定植時苗質

調査区	葉長 (cm)	葉数 (枚)
直植区	28.6	3.3
育苗区	13.9	2.1

(3) 欠株率及び生育調査 (落葉後：調査日11月17日) (表3)

欠株率は、直植区は0%でしたが、育苗区は枯死株が発生し13%でした。

直植区は、茎長が26.3cm、茎径が0.3cm、芽数が3.0個育苗区を上回りました。

表3 欠株率及び生育調査

調査区	欠株率 (%)	生育調査		
		茎長 (cm)	茎径 (cm)	芽数 (個)
直植区	0	38.8	2.1	7.6
育苗区	13	12.5	1.8	4.6



種根根伏せ (育苗区)



鉢上げ種根



落葉後直植区 (左), 育苗区 (右)

考察

生育調査では、直植区は欠株がなく、全ての項目で育苗区を上回りました。また、育苗区は、育苗に係る根伏せ、鉢上げ、2か月間にわたる灌水、定植の各作業があり、多くの手間と資材費がかかります。以上から、苗を流通させる目的がある場合を除き、苗を育苗し定植する栽培法を推奨する理由は見当たりませんでした。

ただし、直植区は、種根採取後すぐに植え付けできるようあらかじめの圃場準備や、準備が遅れた場合は種根の仮植えをするなどの対策が必要です。